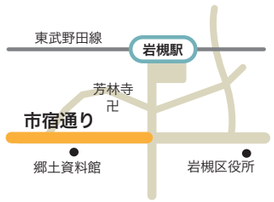
岩槻「市宿通り」

道路の拡幅計画をきっかけに宿場町の面影を再現させるまちづくり



岩槻城の城下町として発展し、後に日光御成街道の宿場町としても栄えた「市宿通り」。その名の通り定期的に市が立ち、多くの人々を集めました。現在も創業200年の商家や、昭和初期の建物も郷土資料館として親しまれるなど、歴史を感じさせる面影を残す反面、時代の移り変わりとともに、象徴的な白壁土蔵づくりの家は、数軒残るだけになってしまいました。

「自分たちの手で、この地の歴史を大切にしたまちなみをつくりたい」。平成8年、市宿通りの拡幅計画をきっかけにこうした想いが湧き上がり、まちづくりが始まりました。市宿商店会の人々が中心となって「市宿通り道路整備協議会」を設立。視察や勉強会、意見交換などを重ねた結果、平成12年に「まちづくり規範」を策定し、建物の保存や色彩の調和など、地域の自主ルールを定めたのです。「皆で守るルールづくりには苦労しましたね。特に沿道の方々には多くの負担をかけましたから」と、当時を振り返るのは会長の萩原良咲さん。

現在は、かつての宿場町を感じさせる景観づくりにも取り組むなど、まちなみは、着々とその姿を変えています。「まちづくりは一人では決してできません。皆で培った地域への愛着を大切にしながら、誇りに思えるようなまちを残したいですね」と、まちづくりへの想いを語りました。

▲昭和20年代前半（左）と、現在の市宿通り。どちらも、郷土資料館の屋上から撮影したものです。道路拡幅工事は、昨年からスタート。建物を新築や改築する場合には、「市宿通りまちづくり規範」に基づいた家が誕生しています。歩道からさらに1m下がった空間は、イベントスペースなどとして活用する計画です。このような活動が評価され、平成17年度には「さいたま市景観協力賞」を受賞しました。

▶江戸末期創業の和菓子店。平成4年、道路に面した部分を解体し、蔵の部分を補修して建て直しました。歩道では、電線を地下に移設する工事が始まったところです。

活動は、〝継続と情熱と団結力〟

活動を続けていくには、「情熱と団結力が不可欠です。祭りや視察など、イベントをいっしょに行うことで気持ちがひとつになりました」と会長副会長の皆さん。最近では、通りのにぎわいも増え、「良い環境が整いつつありますね」といわれるようになりました。今後は、商業の活性化に結びつけることが課題です。

▲市宿通り道路整備協議会会長の萩原さん（中央）と、副会長の天粕一男さん（左）、星野裕孝さん（右）。後ろは、芳林寺にある太田道灌公の像。太田道真・道灌父子は、室町時代に足利成氏の命を受け、岩槻城を築城。この寺には、道灌の遺骨と遺髪が葬られていると伝えられています。

「まち」に想いを込める人たちに出会って

まちの発展を願う人たち、かつての懐かしいまちなみの再現を目指す人たち、まちの変化にあわせて新しい発想で生き抜く人たち…。今回の特集で実際にまちを歩き、皆さんにお会いしてみると、それぞれの地域に活力を感じるとともに、まちに対する愛着や温かさ、そして、人と人との絆の大切さが印象深く感じられました。

せわしない日常の中で、見過ごしてしまっている何げない風景やまちなみ。しかし、それらの陰には、その地で生きてきた人たちの「こころ」や、今まさに動き出そうとしているエネルギーが充ちているのかもしれません。

この機会にちょっと足を止めて、皆さんも、目の前の「まちのかたち」に想いを馳せてみませんか。